



No. 165

ティークレイク

Tea Break

神田川に沿って

会員 三宅 正夫

「あなたはもう忘れたかしら…」に始まる歌詞で、南こうせつ氏が歌った神田川は現実の川で、三鷹市吉祥寺の井の頭池に発し、善福寺川と妙正寺川とを合流、外堀を流れて、花街として有名であったかの柳橋の先で隅田川に注ぐ全長約 25 キロ。昔は上流を神田上水、中流を江戸川、下流のみを神田川と呼んだ。

上流：川の始点は池の東南端の狭まったところ（巾 1m 強）に架る水門橋。「神田川」と刻んだ自然石の標識あり。水源は池の北西端にある「お茶の水」という 1.5m 四方の石枠で囲われた湧水。狩に來た徳川家康がこの水を愛しよくお茶をたてたことがその名の由来。その水を産湯に使った人を江戸っ子と呼んだと。しかし 1970 年代周辺の都市化に伴い地中に滲み込む水が激減し湧水が枯渇。現在は地下水をポンプで汲上げている。池水が汚れて來たのでその浄化のため、2014 年 2 月に掻い堀り。水を排出するに伴い池底に現出したのはビニール傘は言うに及ばず汚れた自転車やパソコン等。マナーの悪いこと。同時に魚、カメ等の在来種保護のため外来種を駆除。長さ 1m20cm もあろうかというブラックバスの大物も。始点から約 300m 位の兩岸は公園で子供がザリガニとりに戯れる小川。それ以降の兩岸はセメント壁。約 1 キロ下った処で三鷹市、武蔵野市、杉並区の 3 つの区域がせめぎ合う。杉並区に入るや櫻並木が始る。区境が実にハッキリ。この流れに沿って三井、新日鉄、NHK、東京電力等の大企業の総合運動場が連なっているから周辺の大凡の様子が想像できるだろう。

中流（永福町より高田馬場まで）：上記歌の「… 二人で行った横丁の風呂屋…」は作詞者が早稲田に下宿していた頃を歌ったものと言われる。早稲田辺りは太田道灌にまつわる「山吹の里」であり、堀部安兵衛の高田馬

場の仇討の場。両者は神田川を挟んで南北に位置する（都電荒川線「面影橋」駅より少し早稲田終点寄り）。この辺りも桜並木が美しい。

下流（隅田川との合流点まで）：名所、旧跡が多い。外堀通り沿い徳川水戸藩の別邸であった小石川後樂園とそれに隣る東京ドームを左にして緩やかな坂道を「お茶の水」に。案内板によると川筋は昔と違うようで、昔は江戸川橋（新宿区山吹町、早稲田の近く）から水道橋図書館、後樂園、東京ドーム、能楽堂を経て現水道橋に至る、所謂小日向下の裾を通るもので、水道橋の東側で木製の樋を架けて神田方面に給水していたとのこと（現在は上記の江戸川橋から高速五号線に沿っている）。川の水は御世辞にもキレイとは言えるものでなく緑に濁っている。JR「お茶の水駅」の辺りはよく写真の被写体になるところで、有名な眼鏡形の聖橋と、それに隣る JR 中央線と、橋脚開口部に覗く地下鉄丸の内線とがワンショットで撮れる。この辺りは堀が深く獅子文六の新聞小説「自由学校」の舞台となった。今やその片鱗もない。JR お茶の水駅北の湯島聖堂で孔子像を拝し、大成殿（孔子廟）に御参りしたら、続いて隣りの神田明神に。休憩所の明神会館の男坂（約 60 段の石段）は江戸時代の町火消「い」、「よ」、「は」、「萬」の 4 組が献納したもの。「芝で生れて神田で育つ」神田っ子の気風のよさを肌で感じて。電気街の秋葉原を後に少し下がると、昌平橋・万世橋間に、赤煉瓦のアーチの並ぶ万世橋駅舎（その上を中央線が走っている）。そろそろ終りに近づく。人形の店がひしめいている浅草橋の目前に緑色の柳橋。多くの遊覧用の屋形船が係留されている。この辺りもよく写真の被写体になっているが、江戸風の佃煮、天麩羅等食道楽者にはたまらぬ。柳橋の橋桁に種々の簪が彫り込まれているのも一見の価値あり。